

となり、新舊文化の諸要素を悉く結合せんとするところに此時代文化の特徴を見、第二章より第四章に亘りて、此時代の文學を概観し、手安朝文學の模倣、古典研究が行はるゝと共に、平民文學の先驅とも見るべき幸若舞、謡曲、狂言の發生及發達を記し、第五章、武士的思想に於て、義經及曾我兄弟が當時人心に深き印象を與へ、主従關係著しく尊重せられて武士生活の基礎を形成し、前期とは稍々色調を異にし來りしも、因襲的思想、第六章の勢力は尙ほ看過すべからずして、佛教思想、古典趣味は依然其影を留め、彼等武士が、個人の實力を認識し、人生固有の生活慾が猛然頭角を現し「榮華の希求」(第七章)は、こゝに戰國時代を發現せりとす。第三編「武士文學の後期」は明應頃より寛永頃に至る約百五十年間とし、第一、二章に於て「文化の大勢」を論じ、戰國時代の割據主義と徳川時代初期の諸要素の結合とを對比し、文化の舞臺は民間に移り、更に地方に普及し、寺院及僧侶は古來久しく占めたりし文化上の地位を失墜せし事を以て此時代の特質とす。第三、四の兩章は「文學の概観」にして、徳川時代初期に於ける文學の新氣運を明かにし、第五章「武士の思想」に於ては所謂三河武士の信念を述べ、主従の情誼を細説し、第六章「儒教佛教神道及基督教の思想」第七章「隱遁思想及び浮世主義」に於ては、彼等武士中に、これ等の思想の存在を指摘し、殊に隱遁思想と浮世主義とが、明日の命さへ知られぬ武

士にありて、一致點を有する事に論及して、筆を擱けり。其論調は大體に於て前編と同一なり。(洛陽堂發行、價二、五〇)(中村)

### ●佛教之美術及歷史

小野玄妙著

本會は佛教關係の繪畫彫刻等に就ての歴史的研究にして、著者が十餘年來隨時世に公にしたりものを輯めて編次せるものなり。著者は印度西域、支那、日本等に現存の古美術品を佛教經典の方面より考證せんとし、之れによりて圖相の研究と同時に併せて佛教の遷遷發達をも窺はんを企てるものなり。従つて本書は圖像の説明に於て常に其典據を経論に採り、大體を博搜して、之れによりて最後の解説を試みんとせるがの主眼なる如し。本書内容を讀むに、第一編「樹木と龍蛇との崇拜」に於ては佛陀伽耶、プハルフト、サンチ等の初期佛教遺存に就て研究し、其等古畫圖に從來道樹禮拜佛足跡禮拜とせられたるものを否定してフェルガソン氏等の説を訂さんとし、又第二編「印度古代の美術と本生圖像」に於て佛本生譚の信仰より、本生圖の傳播等をも論じ、我國現存の玉蟲厨子の横兩面圖及び天壽國曼陀羅が佛本生譚の一を表はせるものなりと説き其他アジャンタ窟壁畫の本生圖、緊那羅物語等の研究あり。第三編「佛傳圖像雜記」は佛陀の傳記圖像中、佛の初利天に昇る説話、降覺成道圖等の研究を載せ、第四篇は「健駄羅、及び西域の美術と佛教」にして其の藝術の起原沿革、干闥及び龜茲

の古文明等の文あり。第五篇には「支那及朝鮮古代の美術と佛教」として支那六朝、初唐の美術(佛像、摩崖像の造建)並びに吳越王錢俶造金漆塔の考證等を收め、第六篇以下は主として日本に關するものにして「飛鳥寧樂時代の美術と佛教」の篇の中には、六朝三韓の佛教文化を説き、飛鳥奈具兩期佛教の系統及美術の論あり。又奈具朝に於ける密教、秘密儀軌の將來、法隆寺壁畫の四方佛の考證、十一面、千手觀音等の尊信等の記事を有せり。第七篇は長谷寺藏千佛多寶塔銅版の考證にして往年喜田博士と論争を惹き起したるもの、其他靈山淨土變考を附せり。第八篇は東大寺研究にして其の草創考亦喜田博士と辯難ありしものなり。第九篇は「平安藤原時代以後の美術と佛教」第十篇は「日本淨土教美術小史」にして前者には入唐八家の請來秘密圖像、圓仁、宗觀請來の胎藏大曼荼羅の研究、善財童子偷卷攷、後者にては奈具朝以前の淨土變相、源信及其以後の淨土教と美術等の有益なる文字あり。挿畫又諸種の圖像を精選したり。(佛書研究会發行、價五、〇〇)〔西田〕

●興國の偉人新井白石 文學博士 上田萬年著

湯島天神祠の香月庵下に移居して梅樹を植ふ、管公に私淑する所ありし白石の評傳にして「青年時代の苦學」「池中の蛟龍」の二章に於ては、明曆三年二月十日朝展の刻、土屋民部少輔利直の假邸に生

れたる白石が、如何に家庭・祖先の感化を受けしかより説き起し、元祿六年冬、偶然にも甲府宰相徳川綱登に仕ふるに至りしまでの經過を述べ「梅咲く天爵堂」の章に於て甲府藩出仕の事情より六代將軍家宣就職に至るまでを叙し、藩翰譜と本朝武林傳との關係に就ては國語にて書かれたる前者は、漢文を以て書かれたる後者の改訂なりとの説は妥當なる批評ならずと斷じ、「禮樂徵榘の上洛」に於て、禮文園の建設を志せる白石の理想及其上洛を記して國書復號論に對する林家との辯難に及び「日出の國・遼・大臣」に於ては主として朝鮮國聘禮使來朝の事を述べ、復號事件に關しては、白石が如何に和漢の書を擧げ、百萬の言を費して縱横に論破するとも君臣の分、明かなる我國に於ては、國王の稱は絶對に神聖にして之を幕府に附與せんませしは僭越と言ふべく、明かに彼の失政なりと難じ「四面楚歌の聲」は白石の運命傾き初めしことより悲愴なりと彼の政治的生涯の末路を語り「閑居の著作」「燔書の慘火」等の兩章以後に於ては閑居以來の著述を擧げ、最後の二章「千駄ヶ谷の月影」「人空し黃鶴樓」は、一世の大政治家の晩年の孤獨と悲境とを描きて筆を擱く。三百卅餘頁の三五版にして隨所に數葉の寫眞を挿む。全編や通俗的に書かれたるが、孔穎達を「こうやういたつ」とし(一三三頁)職原抄を「しきげんせう」國大曆を「ふんだいれき」